

Table 親の養育スタイル項目の得点の平均と標準偏差およびIT相関

項目	M	SD	IT相関
子ども肯定			
1 私の子どもは、育てやすい子どもだったと思う	2.86	0.97	.55
2 私の子どもは、育てにくい子どもだったと思う (R)	2.83	1.03	.58
3 私の子どものいいところを具体的に10個程度あげることができる	3.06	0.90	.32
4 私の子どものがんばっているところ(努力しているところ)が具体的に10個程度あげることができる	2.92	0.90	.26
5 私の子どもの苦手なところや気になるところが具体的に10個程度あげられる (R)	1.56	1.07	.07
6 私の子どもの困ったところを具体的に10個程度あげられる (R)	1.78	1.11	.19
7 私の子どもの性格や個性がよくわかっている	3.21	0.73	.36
8 私の子どもの性格や個性がわからないと思う (R)	3.02	0.91	.41
9 私の子どもは、とてもかわいい	3.79	0.56	.34
10 私の子どもは時々かわいくなくなる (R)	2.39	1.34	.39
育児肯定			
1 育児期に子どもの育児が楽しいと思ってきた	3.14	0.84	.47
2 育児期に子どもの育児がつらいと思ってきた (R)	2.61	1.16	.46
3 育児期に子どもの育児がうまくいっていると実感してきた	2.34	0.86	.60
4 育児期に子どもの育児がうまくいっていないように感じてきた (R)	2.36	1.02	.62
5 私自身のいいところを具体的に10個程度あげることができる	1.97	1.04	.35
6 私自身のがんばっているところ(努力しているところ)が具体的に10個程度あげることができる	2.18	1.07	.27
7 私自身の苦手なところや気になるところが具体的に10個程度あげられる (R)	1.57	1.01	.03
8 私自身の困ったところを具体的に10個程度あげられる (R)	1.74	1.02	.09
9 子どもを誉めることが多い	2.65	0.89	.38
10 子どもを叱ることが多い (R)	1.23	0.91	.29
養育観			
1 子育てにおいては、悪い行動を叱って正さなければならない	3.28	0.84	.12
2 子育てにおいては、よい行動を誉めて教えなければならない	3.75	0.55	.32
3 子育てで困ったときは、自分の配偶者や親に相談してきた	3.49	0.88	.42
4 子育てで困ったときは、自分の友人たちに相談してきた	3.11	1.03	.23
5 子育てで困ったときに、相談する相手がなくて苦労することがあった (R)	3.29	1.00	.32
6 自分の子育てのやり方はうまくいっていたと思う	2.25	0.81	.40
7 自分の子育てのやり方がうまくいっていなかったと思う (R)	2.32	0.95	.35
8 子育てによって、子どもの個性や性格は決まると思う	2.72	0.93	.06
9 自分は叱られて育てられたと思う (R)	1.94	1.23	.14
10 自分は誉められて育てられたと思う	2.03	1.04	.32

(R) は逆転項目

Table 各尺度得点の平均、標準偏差および信頼性係数

尺度	M	SD	α
子どもの発達			
生活	56.73	6.03	.86
対人関係	24.56	2.92	.84
手先	7.89	1.20	.62
運動・遊び	34.98	4.13	.87
言葉	23.56	3.07	.81
情緒	10.45	1.51	.68
ADHD	8.24	9.14	.95
親の養育スタイル			
子ども肯定	27.43	4.90	.67
育児肯定	21.77	5.04	.68
養育観	28.19	4.27	.57

Table 子どもの発達に関する項目得点の男女別の平均と標準偏差およびt検定の結果-1

項目	男子		女子		t
	M	SD	M	SD	
生活					
1 極端な偏食なく食べられる	2.50	0.63	2.59	0.56	-2.52 **
2 最後まですわって食べられる	2.44	0.65	2.52	0.59	-2.22 **
3 箸を使って食べられる	2.77	0.46	2.86	0.37	-3.38 **
4 ほとんどこぼさずに食べられる	2.43	0.60	2.59	0.53	-4.45 ***
5 衣服の着脱をひとりでする	2.77	0.44	2.84	0.38	-2.49 **
6 脱いだ服をきれいにたたむ	2.00	0.71	2.38	0.66	-8.90 ***
7 必要に応じて衣服の調節をする	2.13	0.68	2.33	0.64	-4.91 ***
8 自発的にトイレに行き排尿の失敗がない	2.77	0.45	2.80	0.42	-1.20
9 自発的にトイレに行き排便の失敗がない	2.84	0.43	2.88	0.39	-1.38
10 排泄の始末ができる	2.45	0.66	2.69	0.51	-6.43 ***
11 自分で身支度ができる	2.45	0.61	2.61	0.54	-4.63 ***
12 手伝うことを喜ぶ	2.71	0.48	2.86	0.37	-5.41 ***
13 静かに昼寝や休息をする	2.44	0.62	2.54	0.59	-2.77 **
14 手足が汚れたら清潔にする	2.67	0.51	2.72	0.46	-1.73
15 虫歯にならないように丁寧に歯磨きをする	2.19	0.56	2.32	0.58	-3.66 ***
16 道路に飛び出しをしない	2.32	0.61	2.48	0.53	-4.60 ***
17 信号のきまりがわかる	2.66	0.56	2.73	0.50	-2.02 *
18 危険なものや場所がわかり気をつけて遊ぶ	2.32	0.60	2.46	0.55	-3.67 ***
19 自分や友だちの体の異常を知らせる	2.67	0.51	2.78	0.42	-3.91 ***
20 避難訓練など大人の指示に従って行動する	2.73	0.47	2.81	0.40	-3.05 **
21 食物と体の関係に関心を持つ	2.62	0.57	2.68	0.52	-1.67
22 日にち、時間がわかる	2.40	0.60	2.50	0.56	-2.77 **
対人関係					
1 順番交代で使うことができる	2.64	0.52	2.77	0.44	-4.38 ***
2 友だちと同じ活動に参加する	2.63	0.54	2.75	0.44	-3.95 ***
3 友だちと道具を共有する	2.67	0.55	2.80	0.44	-4.37 ***
4 友だちと一緒に描いたり作ったりする	2.72	0.51	2.86	0.37	-5.10 ***
5 友だちとごっこ遊びをする	2.67	0.53	2.80	0.42	-4.36 ***
6 ルールを守って友だちと遊べる	2.56	0.59	2.77	0.44	-6.44 ***
7 友だちと簡単なルールを作り、遊びを発展させる	2.82	0.43	2.87	0.34	-2.32 ***
8 友だちと一緒に喜んだり悲しんだりする	2.60	0.63	2.76	0.50	-4.52 **
9 目標に向かって友達と協力してやり遂げる	2.66	0.55	2.80	0.43	-4.56 ***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 子どもの発達に関する項目得点の男女別の平均と標準偏差およびt検定の結果-2

項目	男子		女子		t
	M	SD	M	SD	
手先					
1 ○△□などの簡単な形が書ける	2.57	0.54	2.64	0.52	-2.08 ***
2 形の整った字を書くことができる	2.40	0.63	2.57	0.53	-4.65 *
3 自分の名前が書ける	2.69	0.54	2.92	0.32	-8.38 ***
運動					
1 ボールを投げる	2.70	0.55	2.81	0.44	-3.56 ***
2 スキップができる	2.61	0.60	2.73	0.50	-3.54 ***
3 けんけんをして跳ぶ	2.73	0.51	2.79	0.46	-1.95 ***
4 はさみを上手に使う	2.74	0.49	2.82	0.41	-2.82
5 状況に応じた行動がとれる	2.47	0.56	2.61	0.51	-4.17 **
6 様々な用具を工夫して使うことができる	2.67	0.52	2.81	0.40	-4.72 ***
7 描いたり、作ったりすることを楽しむ	2.64	0.56	2.80	0.45	-5.01 ***
8 イメージしたことを体の動きや言葉で表現する	2.75	0.49	2.92	0.28	-6.88 ***
9 身近な生活に使うものを工夫して作る	2.66	0.56	2.77	0.45	-3.51 ***
10 身近な動植物にいたわりの気持ちを持ち進んで世話をする	2.46	0.64	2.69	0.53	-6.31 ***
11 自然や身近な事物、事象を生活や遊びに取り入れて遊ぶ	2.51	0.60	2.71	0.48	-5.90 ***
12 数量、形等を理解して遊びや生活の中で使う	2.65	0.55	2.73	0.46	-2.58 ***
13 身近な用具、器具に興味を持ち、その仕組みや性質に関心を持つ	2.57	0.55	2.62	0.51	-1.69 **
言葉					
1 相手の顔を見て話を聞く	2.61	0.56	2.68	0.52	-1.97
2 日常のあいさつ、伝言等を上手にする	2.61	0.53	2.70	0.48	-2.66
3 人の話を注意して聞くことができる	2.62	0.57	2.71	0.47	-2.87 **
4 自分の気持ちを言葉で伝える	2.69	0.51	2.80	0.43	-3.98 **
5 自分が経験したことを話せる	2.72	0.50	2.86	0.36	-5.30 ***
6 指示を何回か言わなくても理解できる	2.43	0.62	2.57	0.57	-3.60 ***
7 相手に理解できるように内容を伝える	2.51	0.58	2.60	0.53	-2.50 ***
8 絵本や童話のおもしろさがわかり、様々な想像する	2.58	0.57	2.69	0.52	-3.02 *
9 友だちと共通の話題で話し合う	2.31	0.64	2.43	0.60	-3.04 **
情緒					
1 なだめるとすぐに泣き止む	2.53	0.62	2.59	0.55	-1.03 **
2 登園の際、しぶることなく出かける	2.74	0.48	2.83	0.41	-1.94
3 大人がそばにいらなくても動ける	2.68	0.52	2.84	0.37	-3.36
4 思いとおりにならなくても我慢ができる	2.32	0.61	2.43	0.56	-1.82 **

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 子どもの発達に関する項目得点の学年別の平均と標準偏差および分散分析の結果・1

項目	年少		年中		年長		F	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
生活								
1 極端な偏食なく食べられる	2.46	0.64	2.54	0.60	2.64	0.55	7.84 ***	年長>年少
2 最後まですわって食べられる	2.35	0.65	2.49	0.60	2.59	0.59	13.27 ***	年長, 年中>年少
3 箸を使って食べられる	2.69	0.49	2.82	0.42	2.90	0.30	23.02 ***	年長>年中>年少
4 ほとんどこぼさずに食べられる	2.38	0.59	2.51	0.57	2.63	0.53	16.32 ***	年長>年中>年少
5 衣服の着脱をひとりでする	2.62	0.51	2.86	0.36	2.92	0.29	58.40 ***	年長, 年中>年少
6 脱いだ服をきれいにたたむ	1.94	0.73	2.21	0.69	2.37	0.65	33.79 ***	年長>年中>年少
7 必要に応じて衣服の調節をする	1.98	0.70	2.25	0.62	2.43	0.61	41.50 ***	年長>年中>年少
8 自発的にトイレに行き排尿の失敗がない	2.66	0.51	2.79	0.43	2.89	0.34	23.92 ***	年長>年中>年少
9 自発的にトイレに行き排便の失敗がない	2.73	0.57	2.91	0.31	2.93	0.27	26.90 ***	年長, 年中>年少
10 排泄の始末ができる	2.26	0.67	2.58	0.57	2.83	0.40	92.12 ***	年長>年中>年少
11 自分で身支度ができる	2.26	0.63	2.54	0.56	2.75	0.46	69.21 ***	年長>年中>年少
12 手伝うことを喜ぶ	2.73	0.47	2.81	0.41	2.79	0.43	3.43 *	年長>年少
13 静かに昼寝や休息をする	2.44	0.58	2.49	0.63	2.53	0.60	1.89	
14 手足が汚れたら清潔にする	2.69	0.49	2.68	0.48	2.71	0.48	0.27	
15 虫歯にならないように丁寧に歯磨きをする	2.15	0.55	2.29	0.59	2.31	0.55	8.52 ***	年長, 年中>年少
16 道路に飛び出しをしない	2.30	0.59	2.40	0.56	2.49	0.56	9.48 ***	年長, 年中>年少
17 信号のきまりがわかる	2.49	0.63	2.71	0.51	2.87	0.37	47.11 ***	年長>年中>年少
18 危険なものや場所がわかり気をつけて遊ぶ	2.21	0.59	2.41	0.55	2.53	0.56	29.21 ***	年長>年中>年少
19 自分や友だちの体の異常を知らせる	2.64	0.50	2.78	0.43	2.74	0.47	8.23 ***	年長, 年中>年少
20 避難訓練など大人の指示に従って行動する	2.68	0.49	2.80	0.42	2.83	0.40	10.51 ***	年長, 年中>年少
21 食物と体の関係に関心を持つ	2.71	0.47	2.85	0.38	2.41	0.65	65.56 ***	年長>年中>年少
22 日にち、時間がわかる	2.46	0.55	2.66	0.49	2.25	0.62	46.82 ***	年長>年中>年少
対人関係								
1 順番交代で使うことができる	2.61	0.54	2.75	0.46	2.74	0.46	8.38 ***	年長, 年中>年少
2 友だちと同じ活動に参加する	2.52	0.55	2.71	0.49	2.82	0.40	33.83 ***	年長>年中>年少
3 友だちと道具を共有する	2.60	0.61	2.76	0.45	2.82	0.40	17.03 ***	年長, 年中>年少
4 友だちと一緒に描いたり作ったりする	2.67	0.54	2.86	0.38	2.83	0.41	17.08 ***	年長, 年中>年少
5 友だちとごっこ遊びをする	2.67	0.52	2.64	0.52	2.87	0.36	25.86 ***	年長>年中, 年少
6 ルールを守って友だちと遊べる	2.43	0.61	2.79	0.45	2.74	0.46	47.18 ***	年長, 年中>年少
7 友だちと簡単なルールを作り、遊びを發展させる	2.89	0.31	2.92	0.29	2.73	0.50	24.08 ***	年中, 年少>年長
8 友だちと一緒に喜んだり悲しんだりする	2.63	0.61	2.54	0.65	2.84	0.41	25.29 ***	年長>年中, 年少
9 目標に向かって友達と協力してやり遂げる	2.66	0.56	2.84	0.39	2.68	0.50	13.15 ***	年中>年少, 年長

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 子どもの発達に関する項目得点の学年別の平均と標準偏差および分散分析の結果-2

項目	年少		年中		年長		F	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
手先								
1 ○△□などの簡単な形が書ける	2.40	0.56	2.47	0.55	2.92	0.30	126.10 ***	年長>年中, 年少
2 形の整った字を書くことができる	2.47	0.58	2.58	0.52	2.40	0.64	8.73 ***	年中>年少, 年長
3 自分の名前が書ける	2.82	0.42	2.85	0.37	2.73	0.55	6.40 **	年中, 年少>年長
運動								
1 ボールを投げる	2.58	0.62	2.72	0.50	2.93	0.27	49.11 ***	年長>年中>年少
2 スキップができる	2.81	0.42	2.40	0.64	2.79	0.50	63.64 ***	年長, 年少>年中
3 けんけんをして跳ぶ	2.81	0.42	2.53	0.59	2.91	0.34	63.23 ***	年長>年少>年中
4 はさみを上手に使う	2.75	0.49	2.70	0.50	2.90	0.34	18.92 ***	年長>年中, 年少
5 状況に応じた行動がとれる	2.44	0.55	2.53	0.53	2.65	0.52	13.20 ***	年長>年中, 年少
6 様々な用具を工夫して使うことができる	2.79	0.43	2.71	0.47	2.72	0.50	2.97	
7 描いたり, 作ったりすることを楽しむ	2.49	0.64	2.76	0.46	2.87	0.36	52.96 ***	年長>年中>年少
8 イメージしたことを体の動きや言葉で表現する	2.88	0.34	2.88	0.37	2.73	0.48	15.11 ***	年中, 年少>年長
9 身近な生活に使うものを工夫して作る	2.71	0.49	2.88	0.37	2.56	0.59	36.00 ***	年中>年少>年長
10 身近な動植物にいたわりの気持ちを持ち進んで世話をする	2.77	0.48	2.40	0.69	2.55	0.56	32.21 ***	年少>年長>年中
11 自然や身近な事物, 事象を生活や遊びに取り入れて遊ぶ	2.56	0.57	2.61	0.54	2.65	0.55	2.38	
12 数量, 形等を理解して遊びや生活の中で使う	2.86	0.35	2.61	0.54	2.61	0.55	30.40 ***	年少>年長, 年中
13 身近な用具, 器具に興味を持ち, その仕組みや性質に関心を持つ	2.64	0.51	2.59	0.52	2.56	0.57	1.88	
言葉								
1 相手の顔を見て話を聞く	2.93	0.31	2.40	0.59	2.62	0.53	94.73 ***	年少>年長>年中
2 日常のあいさつ, 伝言等を上手にする	2.66	0.52	2.66	0.50	2.64	0.51	0.25	
3 人の話を注意して聞くことができる	2.72	0.52	2.77	0.45	2.52	0.57	22.97 ***	年中, 年少>年長
4 自分の気持ちを言葉で伝える	2.75	0.47	2.81	0.42	2.67	0.52	7.32 **	年中, 年少>年長
5 自分が経験したことを話せる	2.81	0.44	2.76	0.48	2.80	0.41	1.41	
6 指示を何回か言わなくても理解できる	2.46	0.61	2.48	0.60	2.55	0.59	2.06	
7 相手に理解できるように内容を伝える	2.52	0.60	2.67	0.50	2.48	0.56	11.53 ***	年中>年少, 年長
8 絵本や童話のおもしろさがわかり, 様々な想像する	2.57	0.57	2.60	0.56	2.72	0.50	7.75 ***	年長>年中, 年少
9 友だちと共通の話題で話し合う	2.09	0.56	2.18	0.60	2.79	0.45	177.52 ***	年長>年中, 年少
情緒								
1 だめめるとすぐに泣き止む	3.00	0.00	—	—	2.55	0.59	—	—
2 登園の際, しぶることなく出かける	3.00	0.00	—	—	2.77	0.45	—	—
3 大人がそばにいらなくても動ける	3.00	0.00	—	—	2.75	0.46	—	—
4 思いとおりにならなくても我慢ができる	2.50	0.71	—	—	2.37	0.59	—	—

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table ADHD項目得点の男女別の平均と標準偏差およびt検定の結果

項目	男子		女子		t
	M	SD	M	SD	
1 学業において、綿密に注意することができない、または不注意な間違いをする。	0.77	0.73	0.60	0.64	2.20 *
2 手足をそわそわと動かし、またはいすの上でもじもじする。	0.68	0.85	0.41	0.72	3.23 **
3 課題または遊びの活動で注意を集中し続けることが難しい。	0.57	0.75	0.35	0.56	3.22 **
4 教室や、その他、座っていることを要求される状況で席を離れる。	0.45	0.74	0.20	0.50	3.73 ***
5 直接話しかけられたときに聞いてないように見える。	0.52	0.76	0.27	0.49	3.70 ***
6 不適切な状況で、余計に走り回ったり高い所へ上がったりする。	0.40	0.77	0.19	0.52	3.15 **
7 指示に従えず、課題や任務をやり遂げることができない。	0.42	0.63	0.23	0.44	3.42 **
8 静かに遊んだり、余暇活動につくこと（静かに自由時間を過ごすこと）ができない。	0.40	0.65	0.21	0.53	2.98 **
9 課題や活動を順序立てることが難しい。	0.59	0.73	0.35	0.57	3.58 ***
10 「じっとしていない」、またはまるで「エンジンで動かされているように（疲れ知らずでよく動くこと）」行動する。	0.49	0.80	0.30	0.66	2.46 *
11 （学業や宿題のような）精神的努力の持続を要する課題を避ける。	0.63	0.78	0.38	0.64	3.25 **
12 しゃべりすぎる。	0.64	0.91	0.64	0.87	0.06
13 課題や活動に必要なものをなくしてしまう。	0.44	0.65	0.40	0.60	0.61
14 質問が終わる前に出し抜けて答え始めてしまう。	0.57	0.71	0.47	0.69	1.27
15 気が散りやすい。	0.76	0.88	0.51	0.68	2.97 **
16 順番を待つことが難しい。	0.33	0.63	0.16	0.44	3.03 **
17 日々の活動で忘れっぽい。	0.47	0.76	0.35	0.53	1.73
18 他人の妨害したり、邪魔をする。	0.44	0.68	0.25	0.49	3.09 **

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table ADHD項目得点の年長児の平均と標準偏差

項目	年少		年中		年長	
	M	SD	M	SD	M	SD
1 学業において、綿密に注意することができない、または不注意な間違いをする。	—	—	—	—	0.69	0.70
2 手足をそわそわと動かし、またはいすの上でもじもじする。	—	—	—	—	0.56	0.80
3 課題または遊びの活動で注意を集中し続けることが難しい。	—	—	—	—	0.47	0.70
4 教室や、その他、座っていることを要求される状況で席を離れる。	—	—	—	—	0.34	0.66
5 直接話しかけられたときに聞いてないように見える。	—	—	—	—	0.41	0.66
6 不適切な状況で、余計に走り回ったり高い所へ上がったりする。	—	—	—	—	0.32	0.69
7 指示に従えず、課題や任務をやり遂げることができない。	—	—	—	—	0.34	0.56
8 静かに遊んだり、余暇活動につくこと（静かに自由時間を過ごすこと）ができない。	—	—	—	—	0.32	0.61
9 課題や活動を順序立てることが難しい。	—	—	—	—	0.49	0.68
10 「じっとしていない」、またはまるで「エンジンで動かされているように（疲れ知らずでよく動くこと）」行動する。	—	—	—	—	0.42	0.77
11 （学業や宿題のような）精神的努力の持続を要する課題を避ける。	—	—	—	—	0.52	0.73
12 しゃべりすぎる。	—	—	—	—	0.65	0.90
13 課題や活動に必要なものをなくしてしまう。	—	—	—	—	0.43	0.63
14 質問が終わる前に出し抜けて答え始めてしまう。	—	—	—	—	0.53	0.71
15 気が散りやすい。	—	—	—	—	0.66	0.82
16 順番を待つことが難しい。	—	—	—	—	0.26	0.58
17 日々の活動で忘れっぽい。	—	—	—	—	0.42	0.67
18 他人の妨害したり、邪魔をする。	—	—	—	—	0.36	0.62

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 親の養育スタイル項目得点の男女別の平均と標準偏差およびt検定の結果

項目	男子		女子		t
	M	SD	M	SD	
子ども肯定					
1 私の子どもは、育てやすい子どもだったと思う	2.76	1.00	2.96	0.92	-3.25 **
2 私の子どもは、育てにくい子どもだったと思う (R)	2.72	1.07	2.95	0.98	-3.54 ***
3 私の子どものいいところを具体的に10個程度あげることができる	3.03	0.94	3.09	0.87	-0.98
4 私の子どものがんばっているところ(努力しているところ)が具体的に10個程度あげることができる	2.88	0.92	2.96	0.87	-1.42
5 私の子どもの苦手なところや気になるところが具体的に10個程度あげられる (R)	1.54	1.08	1.57	1.08	-0.45
6 私の子どもの困ったところを具体的に10個程度あげられる (R)	1.76	1.12	1.81	1.10	-0.77
7 私の子どもの性格や個性がよくわかっている	3.19	0.76	3.22	0.71	-0.67
8 私の子どもの性格や個性がわからないと思う (R)	2.98	0.94	3.07	0.89	-1.52
9 私の子どもは、とてもかわいい	3.80	0.54	3.78	0.59	0.42
10 私の子どもは時々かわいくなる (R)	2.40	1.34	2.38	1.34	0.27
育児肯定					
1 育児期に子どもの育児が楽しいと思ってきた	3.11	0.84	3.17	0.85	-1.16
2 育児期に子どもの育児がつらいと思ってきた (R)	2.58	1.16	2.62	1.18	-0.57
3 育児期に子どもの育児がうまくいっていると実感してきた	2.34	0.87	2.33	0.84	0.09
4 育児期に子どもの育児がうまくいっていないように感じてきた (R)	2.31	1.03	2.40	1.00	-1.45
5 私自身のいいところを具体的に10個程度あげることができる	1.94	1.06	2.00	1.02	-0.96
6 私自身のがんばっているところ(努力しているところ)が具体的に10個程度あげることができる	2.16	1.10	2.19	1.03	-0.40
7 私自身の苦手なところや気になるところが具体的に10個程度あげられる (R)	1.56	1.06	1.58	0.97	-0.17
8 私自身の困ったところを具体的に10個程度あげられる (R)	1.73	1.07	1.74	0.97	-0.10
9 子どもを誉めることが多い	2.63	0.91	2.67	0.87	-0.71
10 子どもを叱ることが多い (R)	1.20	0.91	1.26	0.92	-1.05
養育観					
1 子育てにおいては、悪い行動を叱って正さなければならない	3.29	0.83	3.26	0.86	0.65
2 子育てにおいては、よい行動を誉めて教えなければならない	3.75	0.56	3.75	0.55	-0.09
3 子育てで困ったときは、自分の配偶者や親に相談してきた	3.53	0.82	3.43	0.95	1.69
4 子育てで困ったときは、自分の友人たちに相談してきた	3.10	1.04	3.12	1.04	-0.25
5 子育てで困ったときに、相談する相手がなくて苦勞することがあった (R)	3.28	1.03	3.30	0.99	-0.32
6 自分の子育てのやり方はうまくいっていたと思う	2.27	0.82	2.24	0.80	0.45
7 自分の子育てのやり方がうまくいっていなかったと思う (R)	2.30	0.95	2.33	0.94	-0.54
8 子育てによって、子どもの個性や性格は決まると思う	2.72	0.86	2.72	0.99	-0.01
9 自分は叱られて育てられたと思う (R)	1.94	1.22	1.93	1.25	0.08
10 自分は誉められて育てられたと思う	2.04	1.04	2.00	1.05	0.67

** p < .01 *** p < .001

(R) は逆転項目

Table 親の養育スタイル項目得点の学年別の平均と標準偏差および分散分析の結果

項目	年少		年中		年長		F'	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
子ども肯定								
1	私の子どもは、育てやすい子どもだったと思う	2.80	0.98	2.87	0.91	2.90	1.02	0.92
2	私の子どもは、育てにくい子どもだったと思う (R)	2.72	1.04	2.88	0.98	2.89	1.07	2.83
3	私の子どものいいところを具体的に10個程度あげることができる	3.06	0.87	3.05	0.90	3.07	0.94	0.05
4	私の子どものがんばっているところ(努力しているところ)が具体的に10個程度あげることができる	2.92	0.86	2.93	0.90	2.92	0.93	0.00
5	私の子どもの苦手なところや気になるところが具体的に10個程度あげられる (R)	1.52	1.04	1.52	1.05	1.62	1.13	0.97
6	私の子どもの困ったところを具体的に10個程度あげられる (R)	1.75	1.09	1.74	1.09	1.84	1.15	0.81
7	私の子どもの性格や個性がよくわかっている	3.19	0.68	3.24	0.70	3.19	0.81	0.68
8	私の子どもの性格や個性がわからないと思う (R)	2.96	0.88	3.13	0.81	2.99	1.01	3.16 * 年中>年少
9	私の子どもは、とてもかわいい	3.82	0.48	3.83	0.48	3.74	0.68	2.85
10	私の子どもは時々かわいくなる (R)	2.27	1.32	2.44	1.33	2.45	1.36	1.76
育児肯定								
1	育児期に子どもの育児が楽しいと思ってきた	3.13	0.84	3.17	0.80	3.12	0.88	0.36
2	育児期に子どもの育児がつらいと思ってきた (R)	2.60	1.14	2.62	1.14	2.60	1.21	0.06
3	育児期に子どもの育児がうまくいっている実感してきた	2.30	0.84	2.35	0.86	2.37	0.87	0.63
4	育児期に子どもの育児がうまくいっていないように感じてきた (R)	2.32	1.02	2.32	0.99	2.42	1.04	1.12
5	私自身のいいところを具体的に10個程度あげることができる	1.97	0.98	2.01	1.06	1.95	1.08	0.24
6	私自身のがんばっているところ(努力しているところ)が具体的に10個程度あげることができる	2.15	0.99	2.22	1.09	2.17	1.11	0.36
7	私自身の苦手なところや気になるところが具体的に10個程度あげられる (R)	1.63	1.00	1.51	1.00	1.57	1.03	1.14
8	私自身の困ったところを具体的に10個程度あげられる (R)	1.77	0.97	1.73	1.02	1.72	1.06	0.20
9	子どもを誉めることが多い	2.69	0.84	2.65	0.88	2.62	0.94	0.47
10	子どもを叱ることが多い (R)	1.26	0.86	1.16	0.90	1.26	0.96	1.38
養育観								
1	子育てにおいては、悪い行動を叱って正さなければならない	3.24	0.85	3.31	0.80	3.29	0.88	0.65
2	子育てにおいては、よい行動を誉めて教えなければならない	3.72	0.52	3.77	0.52	3.75	0.60	0.60
3	子育てで困ったときは、自分の配偶者や親に相談してきた	3.50	0.84	3.50	0.86	3.47	0.93	0.15
4	子育てで困ったときは、自分の友人たちに相談してきた	3.09	1.01	3.10	1.01	3.14	1.07	0.18
5	子育てで困ったときに、相談する相手がいなくて苦勞することがあった (R)	3.25	1.03	3.24	1.00	3.38	0.98	2.00
6	自分の子育てのやり方はうまくいっていたと思う	2.22	0.79	2.29	0.80	2.25	0.83	0.55
7	自分の子育てのやり方がうまくいっていなかったと思う (R)	2.27	0.93	2.27	0.91	2.41	0.99	2.32
8	子育てによって、子どもの個性や性格は決まると思う	2.67	0.91	2.73	0.95	2.76	0.92	0.89
9	自分は叱られて育てられたと思う (R)	1.98	1.23	1.87	1.23	1.98	1.24	1.00
10	自分は誉められて育てられたと思う	2.09	1.07	1.98	1.01	2.01	1.04	1.06

** $p < .01$ *** $p < .001$

(R) は逆転項目

Table 各尺度得点の男女別の平均、標準偏差およびt検定の結果

尺度	男子		女子		t
	M	SD	M	SD	
子どもの発達					
生活	55.46	6.46	58.01	5.25	-6.84 ***
対人関係	23.96	3.27	25.19	2.33	-6.86 ***
手先	7.66	1.30	8.13	1.03	-6.41 ***
運動・遊び	34.17	4.59	35.82	3.39	-6.47 ***
言葉	23.09	3.32	24.07	2.64	-5.20 ***
情緒	10.27	1.65	10.68	1.27	-2.68 **
ADHD	9.62	9.99	6.30	7.02	3.62 ***
親の養育スタイル					
子ども肯定	27.05	5.10	27.80	4.64	-2.41 *
育児肯定	21.53	5.13	21.98	4.90	-1.40
養育観	28.23	4.29	28.10	4.26	0.50

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 各尺度得点の学年別の平均、標準偏差および分散分析の結果

尺度	年少		年中		年長		F	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
子どもの発達								
生活	53.97	6.182	57.50	5.38	58.42	5.638	54.91 ***	年長, 年中 > 年少
対人関係	23.69	3.024	24.81	2.66	25.09	2.893	22.25 ***	年長, 年中 > 年少
手先	7.7	1.248	7.89	1.11	8.05	1.213	7.39 **	年長 > 年少
運動・遊び	35.09	3.98	34.32	4.21	35.50	4.116	7.24 **	年長, 年少 > 年中
言葉	23.5	2.76	23.35	2.90	23.81	3.436	2.13	
情緒	11.5	0.707	-	-	10.44	1.514	0.97	
ADHD	-	-	-	-	8.25	9.169	-	
親の養育スタイル								
子ども肯定	27.02	4.653	27.67	4.52	27.56	5.412	1.63	
育児肯定	21.79	5.101	21.76	4.79	21.77	5.22	0.00	
養育観	28.07	4.308	28.06	4.05	28.43	4.443	0.88	

** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 子どもの発達に関する尺度の下位尺度間相関

	対人関係	手先	運動・遊び	言葉	情緒
生活	.67 ***	.56 ***	.60 ***	.59 ***	.63 ***
対人関係	—	.59 ***	.67 ***	.66 ***	.59 ***
手先		—	.69 ***	.56 ***	.45 ***
運動・遊び			—	.71 ***	.56 ***
言葉				—	.64 ***
情緒					—

*** $p < .001$

Table 親の養育スタイル尺度の下位尺度間相関

	育児肯定	養育観
子ども肯定	.65 ***	.43 ***
育児肯定	—	.52 ***
養育観		—

*** $p < .001$

Table 各尺度の相関

	ADHD	養育スタイル		
		子ども肯定	育児肯定	養育観
子どもの発達				
生活	-.52 ***	.35 ***	.29 ***	.25 ***
対人関係	-.52 ***	.35 ***	.25 ***	.26 ***
手先	-.33 ***	.31 ***	.24 ***	.26 ***
運動・遊び	-.43 ***	.33 ***	.28 ***	.28 ***
言葉	-.54 ***	.42 ***	.33 ***	.30 ***
情緒	-.50 ***	.43 ***	.35 ***	.22 ***
ADHD	—	-.47 ***	-.32 ***	-.17 **

** $p < .01$ *** $p < .001$

医師を対象とした広汎性発達障害児本人への診断説明状況調査

分担研究者：宮地泰士

研究要旨

全国の発達障害児臨床を行う医師を対象に、広汎性発達障害児本人への診断説明の実態と本人への診断説明に対する意識調査を郵送による質問紙にて行った。

対象は日本小児精神神経学会の医師会員 647 名で、201 名（31.1%）から回答を得た。調査対象期間（平成 20 年 1 月 1 日から同年 11 月 30 日）中に PDD 児本人に診断説明を行ったことがあるとの回答は 121 名で、その経緯については「最初から診療計画の中に本人への説明を入れており、計画的に行った。」という場合と、「診療過程において説明せざるを得ない状況となったので行った。」とする場合がほぼ二分する結果となった。また本人に診断説明をしていない症例の理由としては、本人の理解力や年齢が不十分、本人の心理的影響（悲観や自己否定など）への配慮、周囲の理解や支援体制が不十分であることが上位を占めていた。本人への診断説明そのものについては約 70%が「したほうが良いと思う。」と回答したが、障害の考え方や支援のあり方には様々な捉え方があり、地域や個々のケースの状況によっても考え方が異なることを指摘する意見が多かった。本人への診断説明の是非については画一的に決められるものではないが、家族支援の重要な項目のひとつとして、今後も多くの知見を集めていく必要があると思われた。

A. 研究目的

広汎性発達障害（以下 PDD）児やその家族の支援を行っていくうえで、子ども本人への診断名の説明は避けては通れない大変重要な課題である（吉田 2004）。前回の調査報告において我々は、ある程度の年齢になると PDD 児本人から親に自分の診断について質問してくることはよくあることで、その場合最初の対応に迫られるのは家族であることが多いことを報告した。そのため家族支援の 1 つとして本人の診断名を含めた自己理解をどのように深めていくのかを考えることは大変意義のあることと思われる。

また我々は前回報告にて、PDD 児を持つ当事者家族にとって、本人に診断説明することに

ついて専門家からの支援を求める声が多いことも報告した。そこで今回は支援者の代表として全国の発達障害児臨床を行う医師を対象に、PDD 児本人への診断説明の現状把握と意識調査を行った。

B. 研究方法

対象は日本小児精神神経学会の医師会員 647 名で、それぞれに郵送による質問紙調査を行った。調査対象期間は平成 20 年 1 月 1 日から 11 月 30 日までとし、質問内容は（1）回答者の専門科名や診療状況全体に関する質問、（2）調査対象期間中の診療および PDD 児本人への診断説明状況に関する質問、（3）本人への診断説明そのものについての考えに関する質問項目

とによって構成されている。(1)の項目については回答者の専門科名、発達障害臨床の経験年数、調査対象期間中に診療したPDD児の人数とその年代について選択式の質問にて尋ねた。

(2)の項目についてはまず調査対象期間中にPDD児本人に診断説明を行った症例数を尋ね、1人以上と回答した場合は、診断説明は最初から診療計画の中に入れた計画的なものであったのか、あるいは診療過程において説明せざるを得ない(説明した方がよい)状況となったため行ったものなのか、それら以外の経緯によるものなのかどうかについて選択式の質問を行った。またまだ本人に診断説明をしていない症例についてはその理由として多いものを①本人への心理的影響(悲観、自己否定など)への配慮、②理解力や年齢が不十分、③きっかけが得られない、④家族の同意が得られない、⑤周囲の理解や支援体制が整っていない、⑥適切な説明方法が見つからない、⑦自分自身障害診断名の説明に積極的ではない、⑧その他の計8つの選択枝から3つ選ぶ(「その他」の場合は内容を記載)方式で質問を行った。(3)の項目についてはまず、本人への診断説明そのものの是非についての考えを、「できるだけした方がよいと思う。」から「できるだけしない方がよいと思う。」までの5段階の選択枝から選び、その理由を記載してもらった。また今後本人への診断説明を積極的に行っていこうと考えているかどうかを、「積極的に行っていこうと思う。」から「積極的に行っていこうとは思わない。」までの5段階の選択枝から選ぶ方式で質問した。

回答後郵送にて質問紙を回収し、204名から返答を得た。しかしそのうち3名は臨床現場から離れて久しいなどの理由で全ての質問への回答が空欄だったため201名(31.1%)の回答を

それぞれの質問項目ごとにまとめた。

倫理面への配慮

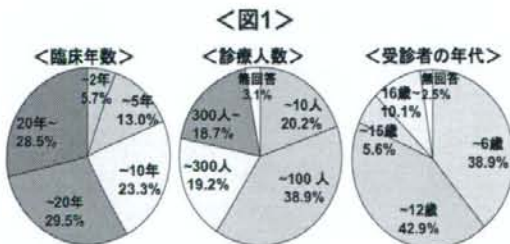
対象となった学会の役員会にて研究調査の承認を受け、今回の調査研究の目的を文書により説明したうえで質問紙への記入を求めた。またデータの集計管理においては個人情報の保護に努めた。

C. 研究結果

(対象者の内訳)

調査時に実際に診療に携わっている医師は193名で、専門科名としては小児科医134名、精神科医56名、内科などのその他3名、無回答が1名であった。なお、小児科と精神科の両方の科を併記した回答が1名いた。また193名のうち、発達障害臨床の経験年数としては10年以上20年未満の回答が最も多く、10年以上の経験者が過半数を占めた(図1)。

また調査対象期間中に診療したPDD児の人数としては10人以上100人未満が最も多く、中には1000人を越える回答もあった(図1)。受診者の年代として最も多い年代については6歳から12歳が最も多かった(図1)。

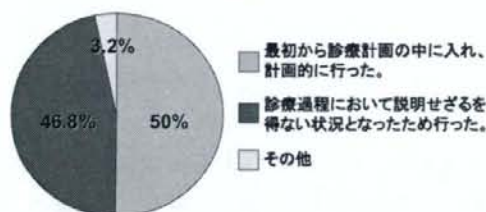


(調査期間中の本人への診断説明状況)

対象期間中にPDD児本人に診断説明を行ったことがあると回答したのは121名(62.7%)で

あった。診断説明の経緯としては「診断説明は最初から診療計画の中に入れて計画的に行った。」との回答が50%であり、「診療過程において説明せざるを得ない（説明した方が良い）状況となったため行った」との回答は46.8%とほぼ二分する結果となった（図2）。本人にまだ診断の説明をしていない症例の理由としては、「本人の理解力や年齢が不十分」、「本人への心理的影響（悲観、自己否定など）への配慮」、「周囲の理解や支援体制が整っていない」が74.9%を占めた（図3）。

<図2>



<図3>

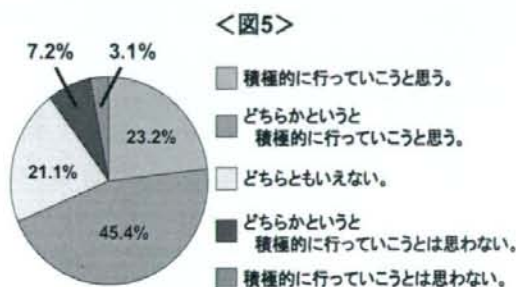
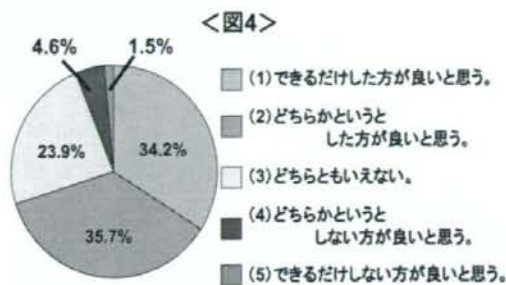


（本人への診断説明そのものについての考え）

PDD 児本人への診断説明そのものについては、「できるだけした方が良いと思う。」や「どちらかというとした方が良いと思う。」といった肯定的な意見が約7割あったが、23.9%が「ど

ちらともいえない。」と答え、6.1%が「できるだけしない方が良いと思う。」や「どちらかというとしらない方が良いと思う。」といった否定的な意見だった（図4）。肯定的な意見の理由を記載したのは71名で、最も多い理由としては、「本人への診断説明によって将来予後や支援の展開において有益な結果が得られると思う。」という意見（59.1%）が多く、「診断の説明は本人にとっては権利であり、医師にとっては義務である。」という意見もあった。しかし28.2%が本人への診断説明には肯定的ではあるものの、あくまでケースバイケースであるとの意見を寄せていた。また「どちらともいえない。」や否定的な意見の理由としては47名から回答があり、「診断名よりも特徴や傾向、個性として伝えることを主とする。」（14.9%）といった意見や、「支援方法や体制の確立、社会啓発、診断技術の向上など診断説明の前にやるべき課題が多い。」（12.8%）といった意見があがり、「本人がどこまで正確に理解できるのか不安がある。」や「診断説明によるリスクやデメリットへの懸念がある。」と本人への診断説明に慎重さを要するという意見があった。本人への診断説明によるリスクやデメリットが目立った症例の経験を持つ医師からはこのような慎重さを訴える意見が多く、42.6%が「診断説明が必要な場合もあるがどちらかという控えたい。」というケースバイケースという意見だった。他にも「発達障害そのものがどのように捉えるか難しい概念である。」ことを指摘し、人の多様性を診断カテゴリー化しようとする現代の風潮への警告を促す意見もあった。

今後の本人への診断説明についての方針としては、68.6%が必要があれば積極的に行っていこうとの考えだったが、10.3%は積極的に行うことを避けるとの意見だった（図5）。



D. 考察

本人にとって正しく自己理解を深めることは自分の社会生活での困難さの原因を整理し適切な支援を自発的に求めたり積極的に対応の工夫を模索することになるだけでなく、誤った自己評価の低下を防ぎ前向きな気持ちでの自立を促すなどメリットが大きいことを指摘する専門家の意見も多い(内山ら 2002, 田中ら 2006)。しかしその一方で自分の障害診断を知ることによる心理的負荷などの様々なリスクや、本人への診断説明が不適正な条件下や不適切な方法によって行われることによる弊害についての注意を促す意見もあり(内山ら 2002, 田中 2008)、それらへの配慮がなされなければ、診断説明によって本人自身が悲観し二次的な問題を引き起こすことや、障害という言葉に甘え必要な努力を放棄するようになり、逆

に極端に「普通」を意識し支援をかたくなに拒否するようになることもありうる。また同様に差別や偏見を増長してしまう危険性も伴っている。このように本人への診断説明はステレオタイプに良い悪いと決めつけられるものではなく、個々の条件や背景に応じて最適な形で提供されるべきものである。しかし本人への診断説明を含めた自己理解支援は、PDD児がある程度の年齢に達し、自分や身の周りに起こる出来事に関心が向くようになれば必ず必要になることであり、このテーマについては当事者やその家族、支援する各種関係者同士がお互いに意見や情報交換を行い、それぞれの見解を深めていく重要なテーマであると思われる。

また今回の調査でも、実際に本人に診断説明をした約半数の例が、最初から計画して行われたのではなく、経過の最中に必要に迫られて行われたものであることから、少なくとも家族と支援者の間では早期から話し合い、どのように本人の自己理解を促していくのかについて十分な意思統一を行っていくことが大切であるように思われた。

吉田(2004)はPDD児本人への診断説明(医学心理学教育)を行うための適応判断条件としていくつかの項目を挙げている。まず子どもの条件としては安定した適応状況を得ていることをはじめ、理解力や自己への気づき、秘密を保持する能力がどの程度あるのかということ。また親の条件としては親自身がどんな困難もやりようはあるという実感があり実践も伴っていることや、子どもの発達特性に対して肯定的な考えを持っていること、両親の方針の一致や専門家との連携などの親へのサポートシステムの確立がどの程度整っているか。そして子どもを取り巻く環境や社会条件として、担任教師やクラスメートの理解や支援体制、子どもが

相談に行くことができる専門機関とのつながり、利用できる社会資源や地域社会の発達障害への啓発度合いなどを検討する必要があることを報告している。これらの内容は今回の調査でも、多くの医師が本人や周囲の理解度や支援体制の確立を診断説明の際に重要視している傾向がみられることと一致しており、本人への診断説明においてこれらの諸条件がどの程度そろっているのかは大変重要な検討事項であると思われる。特に地域によっては社会への啓発や支援体制の不備を挙げる声もあり、今後の重要な PDD 支援課題のひとつであると思われる。

本人への診断説明そのものに対しては、基本的にはそのメリットを認め肯定的な意見が多い反面、デメリットを懸念する声も少なくなく、個々のケースの諸条件によってその是非は異なるため、画一的に良い悪いと決めるのではないが、今後どのような条件の場合にどのような対応が適しているのか多くの知見や議論を重ねていく必要があると思われる。またこのテーマの根本的な課題として、「発達障害とは何か。」といった、人の多様性に対する社会の姿勢について議論を重ねていくことが重要であると思われる。

E. 結論

全国の発達障害児臨床を行う医師を対象に、広汎性発達障害児本人への診断説明の実態と本人への診断説明に対する意識調査を郵送による質問紙にて行った。臨床現場では本人への診断説明を計画的に行っている割合も半数あるものの、必要に迫られる形で行う例も少なくなかった。また本人への診断説明をしない場合の理由として、本人の理解力や年齢の他に、心理的影響への配慮や社会への啓発や支援体制

の不備を挙げる声が多く、今後の重要な支援課題のひとつであると思われる。本人への診断説明そのものに対しては、基本的にはそのメリットを認め肯定的な意見が多いが、デメリットを懸念する声も少なくなく、個々のケースの諸条件によってその是非は異なるため、画一的に良い悪いと決めるのではなく、どのような条件の場合にどのような対応が適しているのか多くの情報交換や議論を重ねながら PDD 児の自己理解支援方法を築き上げていく必要があると思われる。またこのテーマの根本的な課題として、「発達障害とは何か。」といった、人の多様性に対する社会の姿勢について議論を重ねていくことが重要であると思われる。

(参考文献)

- 1 田中真理、廣澤満之、滝吉美和香、山崎透、軽度発達障害児における自己意識の発達-自己への疑問と障害告知の観点から-、東北大学大学院教育学研究科研究年報、54(2)、431-443、2006
- 2 田中康雄、診断名に囚われず、それを活用するという、教育と医学、56(4)、364-369、2008
- 3 内山登紀夫、水野薫、吉田友子編、高機能自閉症・アスペルガー症候群入門、中央法規、2002
- 4 吉田友子、高機能自閉症スペクトラムを持つ子どもへの医学的心理学教育-診断名告知の位置づけとその実際-、発達障害研究、26(3)、174-184、2004

F. 健康危険情報

特になし。

G. 研究発表

(論文発表)

宮地泰士、辻井正次、アスペルガー症候群の支

援の実際. 小児科臨床 61(12): 2426-2430. 2008
宮地泰士, 神谷美里, 吉橋由香, 野村香代, 辻井正次. 高機能広汎性発達障害児を対象とした感情理解プログラム作成の試み. 小児の精神と神経 48(4): 367-372. 2008

(学会発表)

Taishi Miyachi, Misato Kamiya, Yuka Yoshihashi, Masatsugu Tsujii. How do families face the disclosure of an autism diagnosis? A pilot survey among families of children with autism spectrum disorder. The 7th Annual International Meeting for Autism Research 2008. London May 15-17. 2008

宮地泰士, 神谷美里, 野村佳代, 吉橋由香, 辻井正次. 広汎性発達障害児とその周囲への診断告知実態調査. 第 99 回日本小児精神神経学会. 米子. 6 月 13-14. 2008

宮地泰士. 広汎性発達障害の早期徴候と早期診断に対する親の意識調査. 第 30 回日本小児神経学会東海地方会. 名古屋. 1 月 24. 2009

H. 知的財産権の出願

登録状況、登録ともになし。

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行

辻井正次

<論文>

Nakamura K, Anitha A, Yamada K, Tsuji M, Iwayama Y, Hattori E, Toyota T, Suda S, Takei N, Iwata Y, Suzuki K, Matsuzaki H, Kawai M, Sekine Y, Tsuchiya KJ, Sugihara G, Ouchi Y, Sugiyama T, Yoshikawa T, Mori N. Genetic and expression analyses reveal elevated expression of syntaxin 1A (STX1A) in high functioning autism. *Int J Neuropsychopharmacol.*;11(8):1073-84. 2008

Anitha A, Nakamura K, Yamada K, Suda S, Thanseem I, Tsuji M, Iwayama Y, Hattori E, Toyota T, Miyachi T, Iwata Y, Suzuki K, Matsuzaki H, Kawai M, Sekine Y, Tsuchiya K, Sugihara G, Ouchi Y, Sugiyama T, Koizumi K, Higashida H, Takei N, Yoshikawa T, Mori N. Genetic analyses of roundabout (ROBO) axon guidance receptors in autism. *Am J Med Genet B Neuropsychiatr Genet.*;147B(7):1019-27. 2008

Tsuchiya, K., Matsumoto, K., Miyachi, T., Tsuji M, Nakamura, K., Takagai, S., Kawai, M., Yagi, A., Iwaki, K., Suda, S., Sugihara, G., Iwata Y, Matsuzaki, H., Sekine, Y, Suzuki, K., Sugiyama, T, Mori, N and Takei, N. Paternal age at birth and high-functioning autistic-spectrum disorder in offspring. *British Journal of Psychiatry* 193: 316-321. 2008

Takura, S and Tsuji M. Informational and psychological support for siblings of children with Asperger's disorder in Japan: The sibling's self intensity and their understanding of the disorder. *New Zealand Journal of Disability Studies*, 13,106-116. 2008

宮地泰士, 辻井正次. アスペルガー症候群の支援の実際. *小児科臨床* 61(12): 2426-2430. 2008

宮地泰士, 神谷美里, 吉橋由香, 野村香代, 辻井正次. 高機能広汎性発達障害児を対象とした感情理解プログラム作成の試み. *小児の精神と神経* 48(4): 367~372.

吉橋由香, 宮地泰士, 神谷美里, 永田雅子, 辻井正次. 高機能広汎性発達障害児を対象とした「怒りのコントロール」プログラム作成の試み. 小児の精神と神経 48(1): 59-69, 2008

中村和彦, 土屋賢治, 八木敦子, 松本かおり, 宮地泰士, 辻井正次, 森則夫. 成人期アスペルガー症候群の ADI-R (自閉症診断面接改訂版) による診断—生物学的研究との関連で— . 精神医学 50(8): 787-799, 2008

林陽子, 辻井正次. 成人期のアスペルガー症候群者への臨床心理学的支援 (特集 成人期のアスペルガー症候群(1)) 精神医学 50(7), 661-668, 2008

辻井正次. 市民として地域発達支援システムを利用する姿から考える—広汎性発達障害を中心に (第 54 回 日本小児保健学会(群馬)) — (シンポジウム 発達障害の子どもたちの観察からわかること) 小児保健研究 67(2), 283-286, 2008

安達潤, 行廣隆次, 井上雅彦, 辻井正次, 栗田広, 市川宏伸, 神尾陽子, 内山登紀夫, 杉山登志郎. 広汎性発達障害日本自閉症協会評定尺度(PARS)短縮版の信頼性・妥当性についての検討. 精神医学 50(5), 431-438, 2008

川上ちひろ, 辻井正次. 高機能広汎性発達障害を持つ子どもの保護者へのペアレント・トレーニング—日本文化のなかで子育てを楽しくしていく視点から. 精神科治療学 23 (10), 1181-1186, 2008

辻井正次. 高機能広汎性発達障害(その 2)高機能広汎性発達障害の発達支援の今後の課題 (〔日本小児精神神経学会〕第 100 回記念学術集会特集 小児精神神経学の過去・現在・未来(その 1)) 小児の精神と神経 48(4), 337~346, 2008

神谷美里, 辻井正次. 高機能広汎性発達障害青年の性役割観に関する一考察. 中京大学現代社会学部紀要 2 (1), 1-15, 2009

吉橋由香, 藤田知加子, 辻井正次. 広汎性発達障害児の感情の概念的理解と自己の感情体験の統合に関する研究. 中京大学現代社会学部紀要 2 (1), 17-39, 2009

<監訳>

トニー・アトウッド; 辻井正次(監修), 東海明子 (翻訳) ワークブック アトウッド[®] 博士の〈感情を見つけにいこう〉(1)怒りのコントロール. 明石書店, 2008

トニー・アトウッド; 辻井正次(監修), 東海明子 (翻訳) ワークブック アトウッド[®] 博士の

〈感情を見つけにいこう〉(2)不安のコントロール, 明石書店, 2008

<学会発表>

Masatsugu TSUJII: Family support programs for parents of adults with High-functioning Autism and Asperger syndrome in Japan. 8th IMFAR(International meeting for autism research). 2008 5.15-17 London

Masatsugu TSUJII: Group-based family support programs for parents of adults with High-functioning Autism and Asperger syndrome in Japan. 8th Pacific Regional Congress of International for Group Psychotherapy and Group Processes.P1-19. 2008

井上雅彦

<著書(監修)>

井上雅彦 家庭で無理なく楽しくできる生活・学習課題 46.―自閉症の子どものための ABA 基本プログラム.学研. 2008

<論文>

井上雅彦・竹中 薫・福永 顕 発達障害児支援におけるインターネットを利用した連携システム―保護者が管理者となるコミュニティ掲示板の利用―鳥取臨床心理研究, 3-7. 2008

大久保賢一・井上雅彦・渡辺郁博 自閉症児・者の性教育に対する保護者のニーズに関する調査研究 特殊教育学研究 46(1),29-38. 2008

大久保賢一・井上雅彦 自閉症児・者の性教育的問題行動に関する保護者の意識―親の会への質問紙調査から― 発達障害研究 30 (4) ,288-297. 2008

安達潤・行廣隆次・井上雅彦 他 広汎性発達障害日本自閉症協会評定尺度(PARS)短縮版の信頼性・妥当性についての検討 精神医学 50(5),431-438. 2008

吉田裕彦・井上雅彦 自閉症児におけるボードゲームを利用した社会的スキル訓練の効果行動療法研究 34 (3) ,311-323. 2008

竹田伸也・井上雅彦 症例報告 動作療法が有効であった認知症高齢者の1症例 老年精神医学雑誌 19(2),234-239. 2008